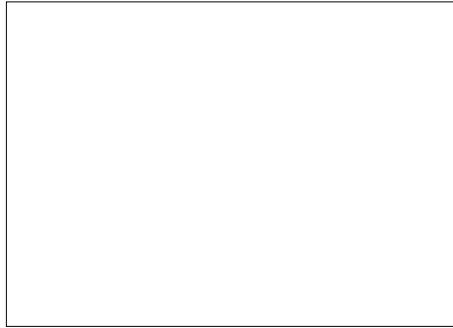


第2部 東京オリンピック・パラリンピックと 千葉の地域創生



講師：熊谷 俊人（千葉市長）
神保 康広（元車椅子バスケットボール日本代表）
渡 正（順天堂大学スポーツ健康科学部准教授）
司会進行：高岡 英氣（敬愛大学経済学部准教授）

藪内教授（以下、藪内） それではこれより、本日のシンポジウムの第2部を始めます。敬愛大学スポーツビジネスコースの担当教員である高岡先生に、これ以降の進行をお願いします。それでは高岡先生よろしくお祈いします。

高岡准教授（以下、高岡） 第2部の司会を担当する敬愛大学の高岡と申します。よろしくお祈いします。第2部のタイトルが、「東京オリンピック・パラリンピックと千葉の地域創生」となっていますが、これはとても大きいテーマになりますので、今回はパラリンピックに焦点を絞って議論を進めていきたいと思ひます。会場にお越しの皆さんのなかには、オリンピックに比べ、パラリンピックにはあまりなじみがないという方もいるかもしれませんが、パラリンピックの歴史は古く、そのルーツは1948年のロンドン大会までさかのぼります。

現在、特に海外では人気のあるイベントで、2012年のロンドン大会では、オリンピックの880万枚に対してパラリンピックは270万枚のチケットが販売され、開会式のテレビ視聴者数は、国内だけでも1,120万人にのほりました。オリンピックが2,630万人ですから、その半数近くが視聴していたということです。いまやパラリンピックは巨大なスポーツイベントになっています。

このようなパラリンピック大会が2020年に日本で開催されることは、私たちの社会において非常にインパクトがあり、特に、障害者スポーツのもつ社会的意義を考えるきっかけになるのではないかと思ひます。

この4月から、いわゆる障害者差別解消法が施行されました。ただ、雇用、就学、公共施設の利用といったさまざまな領域において、障害者の人たちを取り巻く社会環境は、まだまだ改善が求められる状況にあります。こうした状況が改善されるために、インフラ整備等の物理的な次元にとどまらず、障害者という存在に対する社会の価値観の転換が求められるのではないかと考えています。

本日ご登壇の熊谷俊人千葉市長は、パラリンピック会場誘致にも取り組まれた実績があり、いみじくも2020年のパラリンピックは、私たち自身の価値観が大きく変わる、ある意味、オリンピック以上に歴史的に重要なイベントだと言われました。

また、この建物の1階フロアにて展示試乗会をお願いしている、スポーツ車いすの専門メーカーのオーエックスエンジニアリング、車いすバスケットボール（以下、車いすバスケット）の全国的強豪チームの千葉ホークスの存在など、千葉市は障害者スポーツと密接に関わっている自治体です。

こうした点を踏まえ、第2部は障害者スポーツがもつ社会的意義に関し、2020年パラリンピック、そして千葉市の取り組みという観点を踏まえつつ、何らかの示唆が得られるような機会にできればと思います。それでは登壇者をご紹介します。お一人目は、熊谷千葉市長です。

熊谷市長（以下、熊谷） はい。よろしく申し上げます。

高岡 熊谷市長のお生まれは1978年。ご家族の転勤に伴い、千葉、奈良、大阪、兵庫に在住されました。2001年に早稲田大学政治経済学部を卒業後、NTTコミュニケーションズ株式会社での勤務を経て、2007年に千葉市議会選挙に出馬、当選されました。そして2009年の千葉市長選に、政令指定都市では史上最年少の31歳で当選され、現在二期目です。熊谷市長はご自身の公式サイトでマニフェストを掲げていますが、そこには、その文化スポーツの項目で「千葉市を車いすスポーツのメッカ、さらに障害者スポーツの街へ」と記されています。本日は行政の長のお立場から、都市のインフラ整備、かたや人々の価値観の転換といった範囲まで視野に入れつつ、特に千葉市という具体的な都市の在り方を中心にお話をうかがえればと思います。

続いてお二人目は、元車いすバスケットの日本代表、神保康広さんです。

神保氏（以下、神保） よろしく申し上げます。

高岡 1970年のお生まれで埼玉県のご出身です。16歳のときにバイク事故で下半身不随となりましたが、18歳で車いすバスケットに出会い、1990年から9年間、千葉ホークスに所属していました。22歳で日本代表に選出、千葉市の職員をしながら1992年から2004年まで、4大会連続でパラリンピックに出場しています。2000年には千葉市を退職してアメリカに留学し、2003年まで車いすバスケットのリーグに参戦しました。神保さんはオーエックスエンジニアリングで仕事をしたこともあり、九州支社長時代には福岡で車いすバスケットのチームを立ち上げています。2006年にはオーエックスエンジニアリングを円満退社し、青年海外協力隊としてマレーシアでコーチをしていました。現在は車いすメーカーの松永製作所でお仕事をしています。本日は車いすバスケットの第一線で活躍されたお立場から、あるいは障害をもつ一人としてのお立場から、海外でのご経験も含め、お話をうかがえればと思います。

三人目は、順天堂大学スポーツ健康科学部准教授の渡正先生です。

渡氏(以下、渡) よろしくお願ひします。

高岡 1979年のお生まれで北海道のご出身です。千葉大学文学部を卒業後、筑波大学大学院に入学、同院の博士課程人間総合科学研究科を単位取得退学しました。実は私の大学院時代の一つ先輩に当たります。その後早稲田大学のスポーツ科学学術院助手、徳山大学経済学部准教授を経て、2015年より現職でおられます。専門はスポーツ社会学で、障害者スポーツの、特に車いすバスケットのフィールドワークをベースにした研究で博士号を取得されています。また、学生時代にはご自身もバスケットボールの選手として活動していました。本日はアカデミズムの立場から日本における障害者スポーツに対する概念定義や歴史の変遷に関する知見をベースに、お話しをいただければと思います。

高岡 それでは発表に移ります。熊谷市長、お願ひします。

熊谷 皆さんこんにちは。千葉市長の熊谷です。本日はシンポジウム参加の機会をいただき、誠にありがとうございます。2020年東京オリンピック・パラリンピックで一部競技が行われる千葉市の市長として、特にパラリンピックに力を入れている立場からお話をしたいと思います。

2013年9月に2020年のオリンピック・パラリンピックの開催が東京に決定する前の2013年5月、二期目の市長選挙公約で、千葉市を車いすスポーツの聖地を目指すことを目指すと宣言しました。私としては以前から取り組んでいたし、10年程度をかけて聖地化を実現しようとしていました。大会の決定は驚きましたが、それにより、非常に短いスパンで聖地化を実現しなければならなくなりました。

私自身は、たとえパラリンピックの開催地になっていなくても、千葉市の車いすスポーツの聖地化は実現可能であると思っていました。千葉にはオーエックスエンジニアリングという会社があります。ご存じの方はいるでしょうか。私が2013年の5月に「オーエックスエンジニアリングもあるし、千葉ホークスもある。千葉市は車いすスポーツの聖地を目指すのです」と宣言したときに、オーエックスエンジニアリングの会社名を知っている人は千葉市民ではほとんどいませんでした。それを3年間言い続け、いまではメディアに取り上げられることも増え、それに連れ会社名の認知度が上がってきました。

2015年6月に幕張メッセでオリンピック3競技、11月に同じ幕張メッセでパラリンピック4競技の開催が決まっています。オリンピック3競技はフェンシング、レスリング、テコンドー。パラリンピック4競技は車いすフェンシング、テコンドー、ゴールボール、シッティングバレーボールです。

フェンシング、レスリング、テコンドーを見にいったことがある人はいるかもしれませんが、車いすのフェンシング、テコンドー、ゴールボール、シッティングバレーを見にいったことがある人はほとんどいないと思います。私たちは2020年までにこの4競技をここにいる皆さんが「見たことがあるよ。2020年には見にいこうか」と言えるよう取り組んでいかなければならないと思っています。

ちなみにゴールボールは、今年度の千葉市職員の課長研修でも取り入れる予定です。障害者スポーツは見ているだけでは、本当の意味では分かりません。私たち自身が健常者と障害者が同じフィールドでともに戦い、そのスポーツへの理解を深めることはとて

も大切なことで、そのような活動もひとつの在り方だと思っています。

2020年の東京オリンピック・パラリンピックの競技会場都市として何を目指しているのかと言えば、当然ながら千葉市のさらなる発展につなげること、子どもたちの夢と希望を育む街をつくることです。そして最も重要なのは、この2020年の大会を手がかりにして、2020年以降もさらなる多様性を尊重した共生社会を発展させることです。

そのための方向性は四つあります。一つは大会の成功を実現すること。二つ目がスポーツ文化を普及し発展させること。三つ目は多様性に対応した共生社会を実現すること。そして四つ目が千葉市の魅力を高め、集客宿泊を最大化すること、この四つです。

熊谷 市長

大会そのものが成功しなければレガシーも残りません。ロンドンパラリンピックでは、全20競技で世界の国・地域から4,310名の選手が参加しました。大会運営は大会組織委員会が行いますが、千葉市としては、まず競技会場都市としてそれにふさわしい環境整備をしていかなければなりません。来場する人たちにバリアフリーなどのハード面で、また、案内などのソフト面でも充実した環境を幕張メッセに実現しなければならないと考えています。

大会の成功には大会機運の醸成も大事なことです。観戦者も多く人びとの注目を集め、最も成功したと言われるロンドンパラリンピックをも超えるような大会機運の醸成に努めようと思っています。一般的にはなじみが薄いかもしれませんが、ある種のオリンピック用語にレガシーという言葉があります。レガシーというのは遺産という意味で、オリンピック・パラリンピック後、その開催都市に残すものことです。これは国際オリンピック委員会（以下、IOC）も大事にしていることで、使われなくなった競技施設など負の遺産だけが残ることになってはいけません。大会自体のボランティアは大会組織委員会が募集し運営されますが、私たちは千葉市に来る人たちに街のよいところを紹介し、交流のつながりになるようなボランティアを用意し、官民ともに、いわゆる「おもてなし」をしたいと考えています。そのことによって私たちの町の国際的価値を向上させ、未来へと引き継がれるさまざまなレガシーを創出できると思います。2020年以降、この千葉市に何が残り、何が変革の種になったのかということが問われるところです。

二つ目、三つ目の、多様性のあるスポーツ文化を普及し発展させることについてですが、冊子にあるように、スポーツ文化というのは日本ではまだまだ根付ききれていないと思っています。日本人の国民性が真面目なせいなのでしょうが、最後は勝ち負けにこだわってしまいます。海外であれば、たとえば、近所の人たちとラグビーをするときにも地域交流になります。60代以上の人は何人入り、10代の人は何人入り、と、そういうかたちでそれぞれチームを組み、それで交流がはじまります。しかし、日本でそのような事例は少なく、条件をイーブンにしようと、たとえば、還暦野球であれば、還暦以上の人同士でゲームを組もうとするし、なんとなく同じ属性の人たちでスポーツをし、イベントがあれば「○○の部」のようなかたちで細かくセグメントを分ける傾向があり、

結局スポーツを通じた世代間交流や、男女交流などといった流れができません。障害の有無に関わらず、チームを組み、ともにスポーツで交流するような、それぞれの人がそれぞれなりの役割を果たすという文化が根付いていないのです。まずは障害の有無の前に、健常者とも混合すること、いろいろな意味で世代混合や性別混合をしていかないと、本当の意味でのスポーツを通しての交流は生まれません。現在私たちは、少なくとも市が主宰するスポーツイベントや、千葉市のスポーツ推進員の方々が実施する地域のスポーツイベントなどで、そういった文化を少しずつ浸透させ、多様性を尊重した共生社会を実現するために、パラリンピックの認知度向上によって、障害者への認識を変化させていこうと思っています。

オリンピック憲章には、国籍、民族、宗教、性的指向、と、いろいろなものを尊重しなければならないとあります。その多様な人びとを受け入れる日本の環境が、それに対応している状況にあるのかというと、まだこれからだと思います。イスラム教徒は豚肉を食べられないことは知られていますが、豚肉を調理したフライパンを使用した料理も禁止されていることは、あまり知られていません。また、アルコールが禁止だということは、化粧品などアルコール成分の入った製品も使用できないということです。イスラムの戒律に基づいたものごとをハラールといいます。私たちの町の飲食店をはじめホテルなど、イスラム教徒が戒律を破らず、快適に暮らせるハラールに対応したインフラの整備が必要とされ、千葉市は、その取り組みも数年前からしてきています。

また、イスラム教徒やユダヤ教徒の、定期的な祈祷、お祈りをする場所を用意しなければいけません。LGBT（性別と異なる性別を生きる人たちの総称）という言葉が最近よく聞かれますが、性の多様性にも対応しなければなりません。アメリカでも議論されていますが、それに伴ったトイレの問題もあります。千葉市が管理するトイレは対応できても、民間の企業が管理しているトイレで、LGBTの人がトイレを使うときに、トラブルにならないよう私たちの社会はその用意ができていのだろうかといえ、まだまだこれからだと思います。

私たち千葉市は、2020年までにそうしたさまざまな多様性を受け入れられるよう、オリンピック憲章にふさわしい都市を、この4年間という短い期間で実現しなければなりません。そして国民、市民が期待をしている、千葉市の魅力を高め、宿泊、集客を最大化することで経済的な波及効果を高めなければなりません。地元の人たちが観光資源として見逃しているものが、海外の人たちにとって素晴らしいものであったり、自慢に思っているものに価値を見出してもらえなかったり、と、地元としてみてほしい場所と、海外の人たちがみたい場所というのは、必ずしもイコールではありません。海外の人たちにとって千葉市・千葉県の魅力とは何かということ、魅力的なルートづくりや観光資源を発掘・活用し、磨いておく必要があります。

おもてなしに関しては、市民の皆さんにも参加をしてもらい、外国人観光客にどのようなおもてなしができるだろうかを考えたい。公共交通機関アクセシビリティを改善しなければいけません。アクセスというのは交通アクセスという面もありますし、さまざまなかたちの案内等ハードウェアでのアクセス面もあると思います。また、諸外国へしっかり届くかたちで情報発信をしなければいけないと思います。私たちの日本人はまだ旅行代理店等を通しながら旅行する人が多いのですが、海外から日本に来られる方

の半分以上は、それぞれの国の口コミサイトを通して旅行をしていますので、そういうところに載るか載らないかが重要で、掲載するための戦略をしっかりとつけていかなければいけません。中国の方に面白いことを言われたことがあります。「いくら中国語のホームページをつくって、情報を日本のサーバーに載せたところで、中国はファイアウォールで日本のサーバーの情報は見られないようになっていて、中国国内のネットワークに中国語の千葉のホームページを載せない限り見やしませんよ」とのことでした。こういうことを一つとっても、行政は特にそうですが、「見てもらってなんぼ」なのに、何となくアップしておくともう仕事した気になっているようなケースが多く、そういうことにも配慮しながら相手に届くしっかりした情報発信が必要です。

四つ目は、千葉市の魅力とは何かということ、千葉市らしさとして確立することです。国家戦略特区にも指定された幕張新都心のような町に倣い、先進的な町づくりを千葉市で実施をしていきます。

今回のテーマであるパラリンピックに特化して言うと、車いすスポーツの聖地を目指している千葉市には、先ほども申し上げたオーエックスエンジニアリングという、多くのアスリートの車いすをつくっている、松永製作所と並ぶ、日本が誇る世界で戦える企業があります。そして千葉ホークスという日本屈指の強豪チームがあり、それらを資源として活用しながら、障害のある人も障害のない人も、ともに交流できる町をつくっていきたくて考えています。

かつて、車いすスポーツは、練習場所もイベントを開催する場所も借りるのに大変苦労していました。体育館を借りようとしても、床が傷つくとの理由から断られ続けてきました。車いすスポーツの聖地を目指す一連の施策として、まず、千葉ポートアリーナを、議会に2,000万円の予算を認めてもらい、多目的コートを整備しました。これで遠慮なく思い切り車いすを使ったスポーツができるようになり、現在、積極的に車いすスポーツ大会をポートアリーナに誘致しています。ポートアリーナは、アリーナとホテル一体型の施設なので、車いすの選手はホテルの部屋を出るとそのまま、同じ建物内のアリーナまで移動することができます。首都圏でも、アリーナとホテルが一体の施設は珍しく、ポートアリーナを、障害者スポーツのひとつの拠点としていきたいと考えています。現在、日本障がい者スポーツ協会主催のジャパンパラ大会のウィルチェアーラグビー日本選手権、淑徳大学の助力による車いすバスケット全国選抜大会など、さまざまなイベントの開催を続けています。2015年秋には、車いすバスケットのアジア・オセアニアチャンピオンシップ大会を開催しました。この会場にも見にいかれた方がいると思いますが、どのような社会、どのような世界が2020年に待ってるかが予測できたのではないかと思います。車いすスポーツの話をして、福祉の世界の印象をもつ人がいまだ多数だとは思いますが、少なくとも車いすバスケットや車いすラグビーに関していえば、健常者スポーツと同等かそれ以上に激しく、面白いのです。私が車いすスポーツに力を入れている理由はそこにあります。つまり障害者スポーツは、健常者にも分かりやすく、単純にスポーツとして面白い、逞しいアスリートによる競技だということです。私たち千葉市は、障害者スポーツを人びとに理解させ、広めるためのひとつの皮切りとして、車いすスポーツを位置付けています。

アジア・オセアニアチャンピオンシップ大会の決勝戦は4,000人近くの人がポートアリ

ーナの観客席が埋め、熱狂的な応援で会場全体がヒートアップしていました。その熱い雰囲気は、現場にいないと分かりません。障害者スポーツといえば、福祉関連の人たちが静かに集まり、ささやかに応援をしあっているのではないかと、いった多くの人がもつ印象とはまったく違う世界がそこにあります。この大会はリオパラリンピックのアジア・オセアニア地区の出場国を決める、極めて重要な国際大会で、海外も含め、多くのメディアも集まり、その盛り上がりのなかで日本は、3位に食い込み出場権を獲得しました。

開催にあたっては、選手に千葉市内の小学校に、学校訪問をお願いしました。アスリートによる車いすスポーツの試合を見せ、また体験をさせることによって、子どもたちは、一瞬にしてとりこになり、この大会の観戦にも訪れました。そういった体験を通して、子どもたちはもとより保護者も、障害者スポーツの世界を理解していくのです。2017年春にもジャパンパラ大会があり、このときも何百人という子どもたちが観戦に来ていました。東京2020オリンピック・パラリンピックを照準に合わせ、私たちはこういうかたちで交流イベントを、できる限り千葉市の学校を巻き込み、教育委員会と連携しながら展開しています。

私たちは、パラリンピックは幕張メッセを満員にしたいと考えていますが、障害者スポーツの観戦経験がある人の割合は、日本では4.7%という調査結果もあり、それが現実です。海外では10%を超えている国も多く、ドイツでは18%にもなります。まず観戦やボランティアで障害者スポーツに関わる人を増やしていかなければなりません。2020年パラリンピックのためだけの活動ではないので、2020年に会場が、動員により満員になったとしても意味がなく、自らの意思で行きたいと思う人たちによって満員にしなければなりません。パラリンピックだから来たという人は、それ以降は見にこないかもしれません。私たちは、2019年までに見たことがあり、興味をもった人たちに来てほしいのです。2021年以降も障害者スポーツ、車いすスポーツを見にいきいたい人たちを増やしていくために、さまざまに取り組んでいきたいと思えます。

地域においては、健常者が車いすスポーツでチームが組めるほど、普通に競技を楽しめるような環境を整えていきたいと考えています。私もその体験から分かるのですが、車いすバスケットは、障害者の人たちのスキルが非常に高く、健常者でも素人なら参加してもまったく役に立ちません。ただ、健常者が車いすに乗って障害者の皆さんと戦うことによって交流ができ、健常者も車いすスポーツの面白さに気付いていきます。障害者スポーツは、健常者のスポーツよりマイナスの印象をもたれる人が多いのですが、見にいけば分かる通り、道具を使うことによって競技としてもう一步面白くしたプラスのスポーツだと考える方がよいと思えます。

ゴールボールの経験もあります。ゴールボールは視覚障害の競技で、3対3に分かれ、鈴の入ったボールを投げ、受け止め合うゲームですが、私たちも目隠しをし、同条件にすれば参加できます。目隠しをすると五感が研ぎ澄まされ、集中力を高めるためにもよい作用もあります。私たち自身がまず理解をしようと、課長研修にも取り入れました。

また、車いすアスリートの市内での雇用促進も、図っていききたいと考えています。2020年のオリンピック・パラリンピックが東京に決定したときに、千葉市内の企業経営者の人たちに、障害者アスリートの雇用促進の意義を説明しました。彼らは大会で新聞

の一面に載るようなヒーローになる可能性が極めて高く、2020年に向けて青田買いをすべきだとの説得を試みたのですが、反応は薄いものでした。障害者枠での雇用ではなく、アスリートとして雇用すべきだと伝えても、なかなか分かってもらえませんでした。千葉市がかねてより車いすスポーツに力を入れていた理由の一つに、千葉市役所の職員に2名のウィルチェアーラグビー日本代表選手の職員の存在がありました。そのうちの1人は、2017年4月に一般企業に誘われ退職しました。千葉市役所のように公務員は将来にわたって安定的な立場で、週の半分は練習ができる環境があっても、しっかりした給与のうえに毎日練習ができ、海外遠征費も負担してくれる、企業名は言えませんが有名な企業への、アスリート雇用での引き抜きでした。企業は、特に皆さんが知っているようなクラスになると、2020年に起こることに向け準備ができており、今からそのための投資は絶対にすべきだと考えています。それは社会的責務であると同時に、PRも含め会社としてこれはすべきだと判断をしているからこそ、ラグビーの五郎丸選手を雇うような気持ちで、アスリート雇用を行っています。今はまだ2016年で、昔に比べれば圧倒的なスピードで障害者スポーツを支援する流れはできていますが、2020年に待っている社会は現在のようなレベルではなく、私が千葉の経営者たちに「もう手遅れです」と言わざるをえず、「大きな大会の開催があれば、またそのときに千葉ホークスをスポンサーするのがよいでしょう」などと言うしかありません。私たち国民に見えている二歩三歩先の裏側の世界では、大きな勢いのある動きがあります。アジア・オセアニアチャンピオンシップ大会は、三菱電機と三菱商事がスポンサーしました。それをみた新興企業の経営者の人たちは「やられた、これはうちが1億積んででもスポンサーを取るべきだった」と言っていました。このように障害者スポーツを取り巻く状況は、かつてとはまったく違う世界に入っています。障害者の雇用、そして障害者スポーツ、チームへの支援を、千葉市内企業にこれからも呼びかけていきたいと思えます。

障害者スポーツを見たことのある人たちをを増やしていくことの一環として、障害者スポーツに触れる機会として、パラスポーツフェスタというイベントを、千葉ポートアリーナで2017年9月3日に予定しています。また、駅前等でパラリンピックのパブリックビューイングを実施し、併せて障害者のスポーツの普及イベントを行いたいと考えています。これからさらにいろいろな体験ができる環境をつくっていききたいと思えます。

私たち千葉市は、オリンピックの成功はパラリンピックの成功にあると考えています。オリンピックは私たち行政が言わなくても皆さんイメージもできますし、その楽しみ方も分かっていると思います。わが国の歴史において一番重要なのは、このパラリンピックが本当の意味で、この日本で開催されることだと思っていますので、これによって私たちの社会が変わらなければ、何十年に1度のビッグチャンスを見逃すことになると思います。2020年以降に、障害のある人と障害のない人が一緒になってスポーツで汗をかき楽しみ、そしてまた普通に野球やサッカーを見に行くのと同じような気持ちで障害者の車いすスポーツを見に行くような環境が生まれていくことが、私たちの目指している千葉の、そして日本の姿です。これからも、今回のパラリンピックを史上最高の大会にするための貢献を千葉市としてもできればと、いろいろなイベントを企画・開催していきますので、まずは見について楽しみ、その後、私たちと一緒に活動してもらえればと思います。どうぞよろしくお願ひします。ありがとうございました。

高岡 熊谷市長、ありがとうございます。

高岡 続きまして、神保康広さんに発表をお願いします。

神保 あらためまして、神保康広といます。よろしくお願いします。私は、アスリートとして、そして海外でのスポーツ経験のある者として、日本とアメリカ、日本とマレーシアとの違いなどを皆さんに紹介し、スポーツがもつ力やスポーツが担うものとは何かということについて、ご提案できればと思います。

私は千葉市の職員だった時代があります。障害者雇用という言葉がありますが、1995年に千葉市が初めて障害者の雇用をし、そのときに車いすの職員として採用され、緑区、若葉区の区役所などで仕事をするかたわら、「千葉ホークス」という名門チームで車いすバスケットをしていました。熊谷市長から、現在はとてもよいかたちで変化をしているという話がありましたが、20年早くこのような時代がきていたら私ももう少し市役所にとどまれたかもしれませんし、また違った活動ができたのではないかと思います。

当時、海外遠征の際、いろいろな国の人たちからお話を聴く機会があり、アメリカは障害者で対しても生まれたときから、水泳などいろいろなスポーツのできる環境が開かれており、プロとして世界中で活躍するアスリートが（20年前でも）いるという話を聞き、国や自治体が障害者スポーツに地域や社会のなかでどのように関わっているのかということにとっても興味をもちました。さらに私自身も、これからは障害者スポーツがより面白く、よりレベルが上がっていくと思っていたので、その指導者もおらず指導方法もないという当時の日本を離れ、スポーツ先進国のアメリカで障害者スポーツの指導方法を学んでみようと思いました。シドニーパラリンピックの代表候補であった自分自身のアスリートとしてのレベルを上げ、日本代表としてシドニーに行くぞという思いもあり、1999年に退職し、2000年初頭に渡米しました。

最初にアラバマ州バーミングハムにある、障害者スポーツを支援する財団を訪ね、そこでさまざまな部分でカルチャーショックを受け、そのなかで特に驚いたことが三つありました。

一つは、ハード面です。アメリカにはアメリカンズ・ディサビリティ・アクト(ADA)という、障害者にすべての施設へのアクセスを保証する法律があります。たとえば、グランドキャニオンのような国立公園であっても車いすで移動できるよう、エスカレーター、エレベーター、スロープなど、バリアフリー環境を整えており、障害者であることを忘れてしまうほど、障害者にとって快適な環境を実現していました。これは本当に驚きました。そしてもう一つ驚いたことが、すべての人たちがスポーツへの参加の機会を与えられていることです。現在、日本では改善されてきているとはいえ、クラブ活動では、皆で部費を払い道具を買い、遠征費を負担するというような経済的な部分も含め運営はいまだ大変な状況ですが、アメリカの場合は、財団や一般企業が地区のスポーツをクラブチームから支えています。企業が、Tシャツに番号を書いているような簡単なものですが、ユニホームをプレゼントしたりなど、さまざまな支援をしてくれます。利用する施設に関しても、某大手飲料メーカーの広告が立っているのですが、企業サポート体制が整っており、体育館がほしいと要望すると、皆で利用してくださいと体育館

を建ててくれます。

このように3年間、アメリカで車いすバスケットをしながらそういった団体で勉強させてもらいました。所属したチームの最後のほうは結構強くなり、週末になると全米中を飛行機で飛びまわっていたのですが、飛行機代やレンタカーなどの旅費、お酒を除く食費は、すべてサポートを受けており、スポーツにはお金が一切かからず、とても驚きました。

正直に言いますと、アメリカで理不尽に思ったのは、色濃く残っている差別で、道を隔てた丘の上では、外

神保氏

車が並び、白人のお嬢ちゃんお坊ちゃんばかりがいる学校がある一方、川を渡った低い所では、やや古く汚い黄色いスクールバスが止まっていて、ほとんどが黒人の子どもという学校があり、子どものいる状況によりはっきりと教育環境が分かれていました。白人の社会と黒人の社会が分断されていることは、とても辛いことなのですが、スポーツだけは、障害をもっていても家が貧しくお金がなくても、どのような人でもできる環境が用意されていました。国も自治体もいろいろな問題を抱えていると思いますが、スポーツ環境の面ではあくまで平等であることに驚き、障害者アスリートとして大変うれしく思いました。

もう一つ驚いたのが、アメリカはプロスポーツをはじめ、市民スポーツがとても盛んだということです。調べてみましたら、日本の場合だと、プロと言われるチーム数は、野球(NPB)の12チーム、サッカー(J1)の18チームなど現段階で100チーム程度あればよいというレベルであることに對し、アメリカの場合は、野球(MLB)が約30チーム、バスケットボール(NBA)が約30チーム、アメリカンフットボール(NFL)が約30チーム、アイスホッケー(NHL)が約30チームあります。代表的な競技の上部組織だけで120チームもあり、さらに野球でいうと、250ほどのマイナーリーグのチームがあり、合わせると野球だけで300を超えます。その他サッカー、ラクロスやグランドホッケーもプロリーグがあり、すべて含めると500チーム以上が、プロスポーツとして食べていけるかどうかは別としても、存在しています。アメリカの人口は日本の約2倍ですが、プロスポーツチームは5~6倍あり、それに比例して各競技人口の裾野も大変広いものになっています。

アメリカの障害者のなかにもプロとして活躍してる選手がいますが、外国出身の選手、たとえば、オーストラリアは冬がバスケットボールシーズンなので自国でプレーをし、オーストラリアが夏になると冬であるアメリカやヨーロッパでリーグ戦に参加するといったスタイルの選手も数多くいました。先ほど熊谷市長から、アスリートの雇用促進のお話がありましたが、日本の場合は文武両道を推す文化があり、スポーツをしながら一般の仕事もしている方が多いのですが、私はアスリートとして、家庭や経済的なものを犠牲にしてきたと感じていましたので、そのような雇用形態もあるアメリカの障害者スポーツ環境をとてもうらやましく思いました。

帰国し、アメリカのように日本でもスポーツ環境の整備を広めることができないかと、私なりにいろいろと考えました。その一つが、現在NPO法人となっている、車いすスポ

ーツを夏休みなどで4日間、朝から晩まで楽しむ、Jキャンプというプログラムです。千葉県在住の車いすバスケットボール日本代表コーチの及川晋平氏、イリノイ大学卒で長野パラリンピックでメダルを獲得した松江美季氏、そして私の3人の障害者が声を掛けあい企画を立ち上げました。最初は誰も相手にしてくれず、スポンサーもなかったのですが、「いいものだよ、スポーツって本当に楽しくて、いっぱい人が集まってくることなんだよ」と、3人の団体なのですが、周囲を説得していくうちに、大きな企業にスポンサーしていただくことになり、2001年に動き始めました。現在は十数のいろいろな企業や大学から協力を仰ぎ、大きな組織になりつつあります。スポーツはレクリエーションとして楽しむとことはもちろん必要ですが、そのトップを目指すアスリートを頂点とした三角形のピラミッドを形成していくことも大事なことです。まずはその底辺を広げていきつつ、トップアスリートを応援できるような態勢をつくっていきたくて考えて活動しています。

マレーシアの話をしてみると、日本に帰り、JICAの活動としてアメリカで学んだことや経験を生かし、マレーシアでの障害者スポーツの普及を目指しそうと1年間活動をしました。マレーシアは日本の20～30年前の感覚で、障害者は仕事もスポーツをする機会もなく、バリアフリーもないといった状況で、障害者スポーツにおいては途上国です。マレーシアの人たちからは、スポーツを通じた社会参加の希望を、数多く聞くことができたました。

スポーツにどういう力があるのかについて言えば、財団にいたとき、現在、アメリカのナショナルチームのコーチをしている、マイルズ・トンプソンという僕の先輩が、できない子ができる子を助けてあげたりしながらコミュニケーションをとり、目標をクリアすることによってその達成の喜びを得たりと、スポーツをとおして学んでいくことはとても多く、スポーツは教育のツールだと教えてくれました。そして、このスポーツを日本でさらに広げていってほしいと言ってくれました。私はいつも心に先輩の言葉を胸に活動をしています。2020年東京オリンピック、パラリンピックに向け、これからさらに盛り上がっていくとは思いますが、ただのお祭りで終わらせてしまうのではなく、文化として確実に段階を上げ、2020年以降も障害者スポーツを楽しめる人から、そしてトップアスリートを目指す人まで、いろいろな人たちがスポーツに関われる、そんな社会であり街であり続けることが理想ですので、私も、微力ながらサポートし、応援していきたいと思っています。

高岡 神保さん、ありがとうございました。

高岡 それでは渡先生の発表をお願いします。

渡 渡と申します。よろしく申し上げます。紹介にもありましたが、私は千葉大学を卒業しており、十何年か前は、今はもうなくなってしまったのですが、黒砂の浅間神社前に住んでいました。久しぶりにこの土地を訪れ、変わったところもあれば、変わっていないところもあります。千葉市長が熊谷さんになられてからすごく活気があるなど、遠い山口の地から見ていましたので、敬愛大学にお招きいただき話ができることを大変光栄に思っています。

お手元の資料のなかに「パラリンピックスポーツの世界」という小冊子があると思います。これは私のゼミ生によるもので、学生がつくったものですから若干クオリティー・コントロールに難があるのですが、パラリンピックのいくつかの競技を簡単に紹介しています。また、パラリンピックの歴史的経緯や、障害者の概念をどう捉えるのか、など、理論的な部分を記していますので、お時間のあるときにみていただければと思います。

最初に2020年パラリンピックに向けて、日本が障害者スポーツ、パラリンピックに対してどのような目を向けてきたのかというその歴史をおさらいしたいと思います。そこから2020年、そしてその先に向け、どのような態度が必要なのかを考えていきたいと思っています。

渡氏

その前に、私たちは、障害者スポーツと呼んでいますが、それは一体なにかということを確認したいと思います。障害者スポーツに対しては、それをどう捉えるかによっていくつかの視点があると、学問的には言われています。一つ目は、私たちが一番想像しやすいもの、つまり障害者が行っているスポーツのことを障害者スポーツとする考え方が一番単純であり一般的です。

熊谷市長も言われたように、これには少し問題があります。なぜなら、障害があるから障害者スポーツなのだというと、現在、刑事事件で世間をにぎわしている南アフリカのオスカー・ピストリウスという義足の選手はオリンピックや世界陸上に出場しており、障害者がしているスポーツが障害者スポーツだとしてしまうと、彼は1人だけ障害者スポーツのジャンルでオリンピックや世界陸上で走っていることになってしまうわけです。もちろんそんなことはなく、健常者とともにオリンピックの400メートルに出場しているのですから、障害者がしているスポーツを障害者スポーツというと、それは現実との間に矛盾が出てきてしまい、問題となります。

もう少し砕いて言いますと、障害者がしているスポーツのことを障害者スポーツというのであれば、障害者がしている睡眠のことは、障害者睡眠となり、当然そんなことはないにもかかわらず、スポーツだとなぜか障害者スポーツと、当たり前になってしまっています。やはり使えるときもあれば使えないときもある、障害者がしているスポーツを障害者スポーツと呼ぶのは、おかしなことだと思わなければいけません。

二つ目は、アダプテッドスポーツとも言いますが、障害者スポーツを障害者用にルールを変更したスポーツだとの認識が、1980年から90年代あたりにかけて現われました。まだ一般化していませんが、もう少し進んだ考え方もあります。それについては後で説明しますが、少なくとも三つの考え方があることをおさえたうえでお話を聞いていただければと思います。

それでは、日本社会が障害者、障害者スポーツをどのように扱ってきたのかという歴史を、パラリンピックの歴史と、日本の対応の進化を、時代を分けながら考えていきたいと思っています。

1964年の東京パラリンピック以前は、作為的無関心、つまり彼らの存在を無視した時

代、1960年代以前はそのように考えられます。健常者中心の社会、あるいは健常者中心のスポーツから壁をつくり、そこから障害者、あるいは障害者のスポーツを排除していた時代です。

1964年にパラリンピックが開催されますが、当時は一般的に障害のある人たちが社会に出て生活することはほとんどなく、むしろ積極的に隠していくような時代で、急遽パラリンピック開催が決定したため、地域に住みスポーツをしていた人たちではなく、病院など施設に入院している患者のなかで比較的状态のよい人を集め、急造チームで出場させるなど、1960年代以前はそのような時代でした。それを作為的無関心という言葉でここでは表現しておきます。当時の日本は、健常者が障害者との間に壁をつくり、障害者の存在が消えてなくなるような社会でした。

それを転換させたのが、1964年のパラリンピック東京大会です。この大会は、オリンピック組織委員会が希望して開いたわけではなく、正式には少し違うのですが、パラリンピックの大会本部からオリンピック組織委員会へ、オリンピックと同じ場所でのパラリンピック開催の要望があり、その外圧によって実現したのが1964年の東京大会だったと考えられています。

大会を担った人たちも、日本国内の障害者スポーツ振興を図り、その結果をみて国際大会を引き受けるという順序を考えていたのですが、国内の障害者を取り巻く環境改善や障害者スポーツを盛り上げるために、まず国際大会を開催し、そこから国内体制をつくり上げようということで引き受けることにしました。順天堂大学体育学部を創設した東俊郎氏はじめさまざまな人たちが、障害者スポーツというものが外から入ってきたことを機に、日本にも根付かせようと努力していたのが1964年です。これが、日本社会を少し変えたひとつの機会です。もちろんスポーツだけですべてが変わるわけではありませんが、その社会が変わってくひとつの要素としてパラリンピックがあったということです。

パラリンピック東京大会がどのようなものだったかを少しみてみたいと思います。

障害者と言われる人たちは社会から排除されていたので、日常的には車いすに乗っている人を見る機会はほとんどなく、当然バリアフリーもないなかで、急ピッチで環境整備を進めていました。障害のある人がスポーツをする、日本にやってくる、あるいは地域で生活する、といったことがとても珍しく、日本社会にはありえないことでした。そんな人たちが本当にいることを見せ付けたのが1964年の東京パラリンピックでした。人びとは海外から来た障害者アスリートを見て「障害者って暗くて何もしない人だと思っていたけど、同じ障害者でも外国の人たちはものすごく明るくて、それがまずびっくりした。話を聞いてみると、みんな普通に仕事をもって生活をしているし、日本の障害者と外国の障害者、本当に同じ人間なのかと思うぐらい違う存在だった」と、そんな印象を語ったりしています。

それでは、1964年パラリンピックはどのように報道されたのでしょうか。基本的には開会式と閉会式がメイン、つまり祝祭空間、セレモニーだけで、それ以外はあまり報道されていません。また、新聞の報道写真をみると、競技の場面では日本人が写っておらず、外国人ばかりが写っています。

報道には、外国人ですから「私たち」ではない人たち、とする姿勢がみえます。「『あ

の人たち』は、障害をもち、車いすに乗っていたり、切断部位を露出したりしているが、それは『私たち』ではない『あの人たち』が障害者なのだとして『私たち』日本社会との接点のない、非日常的な人たちがやってきて、こういう人たちもいるのだ、ということをもみせているだけなのだ」と、そのように捉え、みえていながらもあくまで「私たち」とは違うのだというかたちで排除する構図が、現在もあまり変わらないとはいえ、当時はより強くありました。

そういう人たちがいるということは知ってはいるが、あまり触れないという意味で、儀礼的な無関心を装う感じがします。エレベーターに知らない人と乗るときに、いるのは分かっている、その人をあまり見るのは失礼だからと視線を階数表示に移すようなもので、存在は意識しながらも無視してしまう、そのような感覚が、東京パラリンピック開催の1964年以降と考えられます。

1964年のパラリンピック大会は、障害者や障害を可視化したという点で、大きな転換点だったのですが、ちょっとした無関心のようなものを育んでしまいました。ただ、スポーツの世界でいえば、障害者スポーツというジャンルが日本に生まれ、東京パラリンピック組織委員会が発展した日本身体障害者スポーツ協会が組織されました。また、神保氏が所属していた千葉ホークスは、1964年のパラリンピックに出場した人が中心となってその後創設されました。パラリンピックの開催によって、日本に障害者や障害者スポーツの存在が知られるようになり、障害者のスポーツの仕組みがつくられ始めました。パラリンピックによって、障害者との間にある壁が少しだけ取り払われました。健常者の社会からパイプが少し通ったようなイメージです。この時代は、健常者社会のなかに少しだけですが、障害者や障害者スポーツが入りはじめた時代です。

障害者スポーツとは、障害者がするスポーツといった概念はこの時代の名残で、知ってはいるが私たちがとは違うといった成り立ちなので、健常者中心の社会という実線があり、障害者の世界は点線で表現され、障害者はその存在を容認されるようにみえて、実は特殊な場所に追いやり「私たち」とは違う基準で捉え、障害者と呼ばれる人たちの競技は障害者スポーツという言い方をしていました。福祉の側からすれば障害者スポーツを盛り上げることによって、少しずつですが福祉環境やバリアフリーを進めていこうとし、法整備が進められ、スポーツの世界もその流れに乗っていました。障害者スポーツは、健常者とは違うスポーツというのが一般の認識ではありましたが、その変化は、1964年パラリンピックのレガシーと位置付けられると思います。

障害者スポーツ環境が整備されるに従い、福祉というレベルでは取まりきらない高い能力を備えた人たちも現れ、競技人口が増えるに連れ競技能力も向上し、1970年代末から80年代、90年代の30年間の間に、福祉やりハビリ、あるいはレクリエーションではなく、スポーツとして楽しむ人、そして見る人が増えていきました。

障害者がするスポーツというと、福祉というと別の文脈が入ってしまい、あまりレベルが高くないと思ってしまい、現実とのギャップができてしまいます。そんな時に日本に輸入されたのが、「アダプテッドスポーツ」という、障害者スポーツを障害をもっている人に合わせて、健常者のスポーツからルールを変えた競技と捉え、パラリンピックや競技力の向上を目指す人も健常者同様にいる現実を理解するための言葉です。

そして、日本で障害のある人たちのスポーツに関する体制、あるいはスポーツとして

観戦するという考え方の集大成となったのが1998年長野パラリンピックでした。

1964年パラリンピック当時は、海外から来た選手たちが楽しそうに競技に参加している様子を伝えるだけのお祭りムードの報道姿勢だったのに対し、1998年の場合は純粋にスポーツとして取り組み、トレーニングの成果を発揮し、諸外国とパフォーマンスで戦っている選手達をしっかりと報道するようになりました。1998年の長野大会で日本は、障害者スポーツを通常のスポーツと捉え、観戦・報道するものだとの考え方が芽生え、携わるようになりました。それは歴史的に大きな転換点であり、日本もスポーツというひとつの空間のなかに障害者スポーツも取り入れて考えることができるようになりました。

ただし依然として、障害者がしているスポーツとの考え方はまだ消えてはいません。少しレベルの低いものと考えながらも同じスポーツであり、健常者のスポーツを頂点に障害者のスポーツまでをグラデーションで、優劣を意識しながら、捉えられてきていると思います。

メディアは、視聴者、読者に対してはスポーツという部分に注目するよう促していたとも言えますし、そのための理論的な裏付けがアダプテッドスポーツという考え方だと思います。障害者スポーツを特殊なものとして捉えるのではなく、健常者のスポーツにつながる一種目として理解しようとするのが、1980～90年代の考え方です。

かつて、新聞における障害者スポーツ報道は社会面が担っていましたが、1990年代が終わる頃には、当事者が望むようにスポーツ面での扱いが増えてきました。この時期に障害者スポーツとはようやくスポーツとして捉えられるようになってきたことがみとれると思います。

長野パラリンピック開催の1998年以降の時代は、儀礼的関心の時代と考えています。儀礼的、形式的にスポーツの大切さを理解し、障害者スポーツに対しても、サポートをしなければならず、同じスポーツなのだから競技会と一緒に実施しなければならず、皆が関心を示すべきものだとの義務的な意識が生まれます。しかしそれは、儀礼的、形式的なもので、実質的なものにまでは追いついていない間欠的な関心だったと思います。

パラリンピックがある年だけ障害者スポーツの報道数が増加し、終わると減少しゼロに近づき、オリンピックの夏期冬期の大会に合わせ、2年ごとにギザギザに関心が示されています。スポーツの報道にはフォーマットがあり、日本の場合、報道の中心は「勝敗」という結果です。障害者スポーツの報道もそれに準じており、パラリンピックでも誰それが金メダル取りました、などとの報道が増え、件数は多いのですが文字量は減ってきています。対象となる選手がどのような環境で活動していて、どのようなドラマがあったのか、どのような問題があるのかというような、社会面を中心に報道されていた頃の記事より深みがなくなっています。スポーツだからといってスポーツのフォーマットに乗せてしまうと、背景を見落としがちになるし、見なくてもよくなってしまうというような状況が、実は1998年から、今に至るまで続いているのではないかと思います。

見たことがある人も多いかと思いますが、2020年オリンピック・パラリンピックの招致活動に向けたポスターが招致委員会で作られ、「この感動を次は日本で、2020年オリンピック・パラリンピックを日本で」のコピーで、2012年のロンドン五輪出場者の銀

座のパレードの写真があしらわれていました。これは大きな問題が一点あります。ロンドンオリンピックはその年の7月27日から8月12日までで、銀座のパレードは8月20日に行われていますが、ロンドンパラリンピックは8月29日から9月9日まで開催していましたので、実はこの後にパラリンピックがあったのです。オリンピックとパラリンピックは一体のもので、同様に大事な大会なものだということであれば、なぜパラリンピックの終了を待てなかったのでしょうか。パラリンピックに出場した選手のパレードも実施するのならそれでも構わなかったのですが、それもせずに、招致用ポスターにはオリンピック選手のみが写った写真を使っていたのです。

それは障害者不在のままオリパラを実施するという、パラリンピックに対する想像力が不足しており、パラリンピックは大事だというのは形式的な関心であることを示しており、とりあえずオリンピック・パラリンピックは大事だといっておけば何とかなる、といったこの日本社会の雰囲気がみて取とれるのではないかと思います。さらにいうと、招致ポスターには「日本は一つのチームだ」とあります。しかし、そのチームのなかには障害者のパラリンピアンは含まれていないのだろうと突っ込みを入れたいくなる、制作サイドの想像力の欠如に、現在の私たちの社会の雰囲気が如実に表われていると思いました。

また、日本はオリンピックではメダルを取れているのに、パラリンピックではメダル取れていないという珍しい国です。パラリンピックのメダル獲得1に対して、オリンピックのメダル獲得はその約2.7倍にもなります。このことについて詳しくみて、統計的な操作を加え、各国のオリンピック、パラリンピックのメダル獲得率を比べ、並べてみると、他国は一応正規分布になりますが、日本の場合、はずれ値なので考慮に入れなくてもよいことになってしまいます。つまり、日本の在り方は世界的にみてもおかしいわけです。オリンピックでメダルを取れている国は、パラリンピックでもほぼ取れているにも関わらず、世界で日本だけがその状態になく、これではオリンピックに対するパラリンピックの振興姿勢に対して疑問がもたれます。

このような状況の解消のため2020年に向けて、政策的なアプローチがとても重要になってきます。高岡先生が言われたように、日本にも障害者差別解消法がありますので、それを梃子に今後、多様性をもった社会を掛け声に、具体的な取り組みが重要になってきます。イギリスのスーパーは、日本のスーパーと違い、レジ打ちの人が座って仕事をしています。座ってレジが打てるようハードがつくられているということは、健常者であっても車いすの人であっても構わないということで、これが多様性のある社会のひとつのかたちではないかと思います。どのような人が来てもそこで仕事ができるということは、その属性を問わないということで、こういった物理的な仕組みというものをどれだけつくっていきけるのか、これが正解というわけではないのですが、大事なことだと思います。

もう一つ、障害者スポーツに対し、もう少し文化的な側面からのアプローチを考えています。今までは、作為的な注目、無礼な注目といった言い方をされる、その存在は知っているのに無視する、取りあえずの関心を示すだけの社会状況に対して、スポーツをしている人たちの身体に、今後は注目していく必要があるのではないかと思います。

障害者スポーツは、先ほど熊谷市長も言われていましたが、道具を使うものなのです。

人間の生身の肉体と、義足や車いすという道具とのコラボレーションによりパフォーマンスを発揮する、そういうスポーツなのだと思いを転換、考え方を考えていくことが必要で、何かできないことがある人がしているのではなく、どのようにしてそのできない部分をできるようにしているのか、あるいはできない部分を補って道具とコラボレーションしているのか、という具体的な部分に注目できるようになっていくと思います。

たとえば、ゴールボールやブラインドサッカーというのは、目を使わないですスポーツです。つまり、目がみえない人たちがしている、のではなく、視覚情報をあえてシャットダウンすることで、あるいはシャットダウンした状態でプレーできる人たちのスポーツなのだ、と私たちは考えます。

そうすることで、今までのスポーツや社会に対する考え方が変わっていくと思います。これは当たり前のことで、サッカーをしている人に対し、サッカー選手は足しか使わずボールを扱うのって大変ですよ、という人はいません。障害者スポーツも同様に、ゴールボールやブラインドサッカーは目を使わないでプレーをするスポーツだし、車いすバスケットは立ってではなく座ってするものだ、というように、積極的なかたちで障害者スポーツや障害者のいる社会を考えていくということが、今後、大事なことになるのではないかと思います。

全体的にみると、作為的無関心から儀礼的無関心を経て儀礼的関心へ至り、今後は作為的関心をもち、壁をつくるのではなく、さらに注目をしていくことが必要です。社会のなかにある異文化的な存在として障害者スポーツを捉えることで、私たち自身の社会の在りようを変え、考えていけます。2020年のパラリンピックと、それに向けたこれからの4年間をそういう場にしていきたいと考えています。以上で発表を終わらせていただきます。ありがとうございます。

高岡 渡先生、ありがとうございました。

高岡 それでは、ディスカッションに入りたいと思います。お聞きになったとおり、さまざまな観点からたくさん切り口があり、いくつか議論の位相があったと思います。まず熊谷市長から、次期パラリンピックは、私たちが、障害者スポーツというものに接する非常に大きな機会だというお話がありました。障害者スポーツは、トップレベルにおいて展開される競技スポーツである一方、車椅子バスケットを続けてこられたなかでの、神保さんのご経験に基づいたいろいろなお話は、いわゆる一般レベルの非常に広い裾野における障害者スポーツに関わりのあるものだと思います。さらに、渡先生からは、その先にある障害者を取り巻くこれからの社会の在り方までを射程に捉えたお話をいただきました。

まず、熊谷市長にうかがいます。市長のお考えは、単なるスポーツにとどまらず、社会そのものの在り方を転換していく、ひとつのきっかけ、入口としてパラリンピック、あるいはそこで行われるトップレベルの障害者スポーツに注目されていると受け取りました。特に車いすスポーツに着目し、千葉市をその聖地にするというお考えの、着眼点の由来をお聞かせください。

熊谷 障害者スポーツに対するマイナスのイメージには根深いものがあります。車いすス

ポーツのよいところは、車いすがあることによって理屈抜きに面白いことで、観戦するとそれがよく分かります。人間と道具によって新たな次元に昇華されたスポーツだということが、誰が見ても分かります。誰がみてもそれが分かるというのはとても大きなことです。共生社会のため、障害者のためなどということとは関係なく、見にいくと単純に面白いという、ただそれだけで、私はいいと思っており、その面白さを第一に考えます。アンケートに多くみられる「パラリンピックに関わったほうがいいと思う」という回答など、理念が大事なことは分かりますが、一般の方はそれを面白いとは思っていません。これでは駄目です。道徳や奉仕活動ではなく、普通に面白いもののだとして関わってもらうために、私も職責上いろいろな障害者スポーツを見てきましたが、車いすスポーツがある種、一番入りやすい競技のひとつだと思っていますので、そこから考え方が変わった人は、他の障害者スポーツにも先入観なく触れてくれるはずだという思いがあります。また、千葉市の産業ビジョン上にも、オーエックスエンジニアリングがあったり、千葉ホークスがあったりと、千葉市のもっている強みを都市としての強みに生かしていくためにも車いすというのがひとつの軸になるという、この両面で私がまずは車いすスポーツに特に注力すべきだ、という判断したということです。

高岡 突破口として市長が着眼されている事例は、とても有効なことだと思います。神保氏から、アメリカと日本とでは障害者をとりまく環境に大きな差があり、アメリカでは車いすバスケットチームにスポンサーがつくなど、プロスポーツとして認知されており、スポーツ以外に職をもたなくても生活ができるのお話がありました。市長のお話になげると、アメリカにおいて車いすバスケットは障害者スポーツのなかでも特別な存在なのでしょうか。

神保 はい。車いすバスケットが一番人気があるのは事実です。先ほどエリートを頂点とし市民が底辺となる三角形のピラミッドができないとスポーツは広がらないという話をしましたが、車いすバスケットは大学にもチームがあり、カレッジリーグという車いすバスケットボールのリーグがあり、将来はプロになりたいと頑張ってる選手もたくさんいる盛んな競技ですので、アメリカのなかでは一番人気のあるスポーツだと認識しています。

高岡 ありがとうございます。マイナースポーツはたくさんあり、その振興にはメディアへの露出が、興味をもつきっかけとして有効で、そのためにはそのスポーツが見て面白いということはアピールの重要な要素になります。プロスポーツの研究者の立場からすると、やはりその先の話が気になってきます。

熊谷 大事なことは、将来的に目指すべきことと、プロセスを示し現実に結果を出すことを分けて考えることです。日本はパラリンピックに力を入れていますが、そのときに必ず出てくる批判があり、それは「パラリンピック、パラリンピアンは一部の握りのエリート、障害者エリートであって、これに注力しすぎるのはよくないんじゃないか」というものです。2018年、2019年には議論されはじめるだろうと私は思っていますし、それはロンドンなど他の国でもやはり経験してることです。私はその議論も大事なことだとは思いますが、日本の社会は理想のはるか手前にあるのです。障害者は一様だと思ひ込み、健常者スポーツ同様、トップレベルのアスリートもいれば、趣味や生きがいとして楽しんでる人もいることすら理解せず、障害者のスポーツは、何か大変な壁を乗

り越えながらみんなが支えてあげなければいけない、かわいそうな人たちであるかのような先入観があるのです。そのような、障害者にもある健常者と同じ当たり前の構図に気付くためにもパラリンピックはとても大事な契機です。そこでトップレベルの競技を見ることによって障害者の多様性に気付くということができ、日本社会はまずこの入口に立ち、その次の段階で、障害者スポーツのできる環境をどのようににつくっていくべきなのかを、パラリンピックで感動した人たちと議論しようということです。私は段階論者なので、学問というよりも理論として現実的に社会を動かしていくために、まずパラリンピックをひとつの契機としてまず国民の意識を変え、その次に理想に向かって一歩ずつ進めていくべきだと思います。私たち行政は推進委員とともに地域において健常者と障害者の混合の環境を整え、またバリアフリーの街をつくっていきます。それは行政という財源のある理想を実現できる政治という舞台があるからできるわけです。国民全員についてきてもらうためには、まずトップの意識を変えないといけません。私は、障害者のスポーツ環境は、政治のトップによって変えていく必要があると思っています。

高岡 ありがとうございます。政治のトップレベルの動向はとても重要です。一方で熊谷市長も一般のスポーツ環境と、障害者スポーツを取り巻く環境を改善していくことは両輪で考えていると思います。神保さんと以前、お話ししたときに、そもそも日本では、車いすバスケットができる環境自体が、たとえば、体育館の利用などで非常に厳しい現実があるとうかがいました。その点についてお話しいただけますか。

神保 はい。私は東京都墨田区在住で、東京オリンピック・パラリンピック決まってから、支援についての相談を受けたなかで、東京都のオリパラ推進室の方と話をする機会があったのですが、東京都では、車いすバスケットに使用できる体育館が2つしかないという知り、そのうえ、そのうちの1つは改修工事をした際に、車いすは汚れるし、床も傷つくということで使用禁止となり、現在、葛飾の総合体育館しか使用できないということを知りました。そこで環境の改善をお願いしたのですが、施設の運用は各区の自主性に任せており、東京都としてはお応えできないということでした。体育館で車いすバスケットができない根拠がはっきりとしないまま、現状が固定されています。

熊谷 千葉市はどこの体育館でも車いすバスケットの利用ができます。コミュニティーセンターでも練習していますし、競技会も開催しています。私たち千葉市は3年前か4年前に全面開放していますので、東京都も変わっていかなければいけません。

高岡 はい。ありがとうございます。実は私もいい機会なので、千葉市内の体育館に車いすバスケットボールの利用の可否を問い合わせしてみました。確かに、千葉市では多くの体育館で利用が可能で、とても先進的な街だと思いました。

神保 ちなみに20年前の市役所勤務の頃、ポートアリーナの使用の申請をしたのですが、断られました。現在の千葉市の方向性は素晴らしいと思います。

高岡 それでは渡先生、これまでの話をふまえていかがでしょうか。

渡 学問的な部分と政治的な部分がありますが、方向性に隔たりがあるわけではありません。政策的には一歩一歩できることを実行に移していくことが大事です。一方、学問的には、障害者スポーツへの見方を転換し、関わりやすくするため、マインドセットを変えていくことに注目しています。市長が言われたように、私たちはどうしてもものごとをカテゴリーで捉えがちで、たとえば、お父さんといえば、お父さんのなかにもいろいろ

ろな人がいて、それにはグラデーションがあるにもかかわらず、理想のお父さん像をイメージしがちなのと同様、障害者という存在もそのイメージが固定化されています。当然いろいろな人がいるに、固定観念に縛られています。私も、初めて調査に向かい、車いすバスケットをしている人と会い、お話をするとき、おもむろにタバコを吸いはじめたのを見て驚いたことがあります。これは驚く方がおかしいことで、これが固定観念というもので、それを壊し、変えていくことが大事です。市長が言われたように、中央政府レベルで、

高岡 准教授

質疑応答

高岡 フロアのほうからご質問をいただけますか。

H 神保さんに質問ですが、今年50周年を迎えた国民的娯楽番組の『笑点』など人気番組で宣伝すると、視聴者も関心をもってくれるのではないのでしょうか。

神保 実際、皆さんがどの程度、障害者スポーツについてご存知なのでしょう。吉本興業所属のタレントさんには車いすに乗っている障害をもった方もいます。私も驚いたのですが、障害者をとりまく環境がとても変化してきています。芸人さんや歌手などさまざまな分野で、障害をもちながら活躍されてる方は、まだ目立ちませんがたくさんいます。オーエックスエンジニアリングの車いすが使われた、木村拓哉さん主演の『ビューティフルライフ』というテレビドラマで、常盤貴子さんが車いすを使う障害者の役を演じていました。そのようなドラマが違和感なく受け入れられるほど時代は変化しており、これからもあらゆる分野において活躍する人たちが増えてくるだろうと思っています。

I 本日は貴重なお話いただき、ありがとうございます。先ほどのお話のなかで、課長研修でゴールボールをされるとお聴きし、素晴らしい取り組みだと思いました。多様性を受け入れること、そして捉え方を変えていくことが、パラリピック、パラスポーツを、普通のスポーツとして発展させるにはとても重要なことで、偏見や先入観は大人たちが変えていかなければうまくいかず、ここにいる皆さんもそのお話に大いに納得されたと思います。特に渡先生の「目を使わないスポーツなんだ。道具、機械を使ってするスポーツなんだ」と認識することで捉え方が180度変わるというお話を聴くと、まだバイアスのなかにいる大人たちよりも先入観のない子どもたちのほうが多様性を受け入れ、積極的に親に働きかけるボトムアップで進み、浸透していく気がします。車いすスポーツは小学校への訪問をされていると聞きましたが、ぜひ、課長研修で取り入れたゴールボールや、シッティングバレーなども、子どもたちに、また一般の人々にも体験できる機会をさらにつくっていただければ、障害者スポーツがより広がっていくと思いますので、

ぜひ検討していただきたいと思います。

熊谷 ありがとうございます。私たちもそれが大事なことだと思っています。現在、教育委員会と、オリンピック・パラリンピック教育としてパラスポーツをどのように教えていくのかを検討し、また、周囲の皆さんがパラスポーツにふれる機会を増やしていくことは、私たちの行動計画のなかに入っており、具体的にいつからどのようなかたちで広げていくのかを、これから皆さんに披露できると思います。ちなみにゴールボールに関しては私も課長研修のなかで参加しています。駅前など目立ち、飛び入り参加もできるような場所で、関心をもつ人たちと一緒にパラスポーツをし、町中でも盛り上げていく方針です。

○ ぜひ、Twitterに結果をアップしてください。

熊谷 はい。わかりました。ありがとうございます。

藪内 はい。どうも長時間ありがとうございました。予定の時間過ぎてしまいましたが、最後に敬愛大学の三幣学長から閉会のあいさつを申し上げさせていただきます。

三幣学長 敬愛大学学長を務めている三幣です。話が盛り上がり、もう少し続けたいという雰囲気も残っていますが、予定の時間を過ぎましたので、これでシンポジウムのを終えたいと思います。ご参加をあらためて感謝申し上げます。また、休憩もほとんどとれない長い時間のなか、本当にお疲れさまでした。

地方創生は、安倍晋三内閣の主要な政策テーマです。千葉県の場合は、地方ではなく地域の活性化ではありますが、スポーツの発展は重要な要素であり、テーマです。

第1部では、マリーンズの山室社長と、広島で生まれ育った本学の粟屋准教授から、スポーツといえばまだまだ野球が主役である日本で、千葉と広島との比較をしながら、野球を通してどのように地域を盛り立てていくかについてのお話をいただき、まだまだすべきことがたくさんあるを思いました。第2部では、千葉市長から、東京パラリンピックに向け、車いすスポーツの聖地としてどのように取り組んでいくのかというお話で、千葉市、千葉県にとって非常に重要な、また日本を牽引していけるような動きに期待がもてましたし、参加を含め協力を惜みず、そして観戦に行きたいと思います。神保さんには、ご自身のご経験からスポーツの力ということについてのお話を、そして渡先生にはパラリンピックの歴史のお話をうかがいました。50年以上前の東京オリンピックから始まる古い歴史がありながらも、まだいろいろと考えていかなければならないということに、思いを新たにしました。

今回のシンポジウムを終え、スポーツに関わるこの地域の活性化のためにすべきことがまだまだあるを思いました。次回以降もできるだけ、この地域の皆さまと一緒にこのような機会をもち、意見交換をしていきます。本日は本当に貴重な時間、遅くまでご参加いただき、ありがとうございました。また、ご公務含めご多忙なか参加いただいた先生方にもあらためて御礼申し上げます。ありがとうございました。

藪内 皆さま、長時間のご参加、ありがとうございました。最後にお手元のアンケートにご協力いただければ幸いです。それから1階のフロアで、千葉市が誇るスポーツ車いすのトップメーカーのオーエックスエンジニアリングが、スポーツ車いすの展示試乗会を

行っています。その軽さや優れた操作性に触れていただければと思います。

くまがや・としひと Toshihito Kumagaya
じんぼ・やすひろ Yasuhiro Jinbo
わたり・ただし Tadashi Watari
たかおか・ひでき Hideki Takaoka